

『アット・ザ・ホライズン』に見る父子の関係 格差社会を生きる2つの家族の物語

橋本 彩

1. 物語のあらすじ

『アット・ザ・ホライズン』はラオスにおける初の犯罪スリラー作品である。主人公のシンは、社会的な立場が高く権力をもつ裕福な父親がいるため、親の金や権力を背に全てを自分の意のままにしようと好き勝手に振る舞う大学生。彼を取り巻く人々も、彼の父親が有力者であることを知っているため、彼の行動を咎める者はおらず、むしろそのような周りの態度が彼を増長させている。そんな中、シンの彼女であるムックだけは無責任な行動を繰り返すシンに対して態度を改めるよう注意するが、シンは全く意に介さない。ある晩出かけたナイトクラブで、シンは肩のぶつかった柄の悪い男に喧嘩を売り、手にした銃をもみ合う中で発砲してしまう。混乱したシンはその場から車で逃げ去ろうとするが、シンの発砲によって怪我を追わされた男に執拗に追われ、シンも怪我をして気絶してしまう。そして目覚めると、シンは人里離れたある廃墟の一室で、椅子に手足を縛られ座らされていた。

シンの手足を縛った男は、ルッドという地方からヴィエンチャンに出てきた口のきけない実直なバイク修理士だった。ルッドは貧しいながらも、市場で野菜を売る愛する妻と6歳の娘と幸せな暮らしを送っていた。しかし、ある日起きた事故を境に復讐を果たすために生きる男となっていく。

シンはルッドと面識がないため、なぜルッドが自分を縛り付けているのか皆目検討がつかない。しかし、ルッドは明らかにシンに対し、敵意を持っているのだった。口のきけないルッドにシンはいつものごとく父親を交渉の引き合いに出す。「お金が欲しいなら父親が払ってくれる」と言うシンに対し、ルッドは怒りを顔に靴から札束を取り出し、シンに向かって投げつける。ルッドとのやりとりの中で、シンが父親を引き合いに出す度にルッドが怒りを顔にすることから、シンと父親がどうやらルッドの憎むべき相手であることが徐々にわかっていく。

シンは何とかルッドから逃れようと試みる中で、ルッドが持っていた一枚の写真を見て全てを理解する。シンは以前ルッドの妻子をカーチェイス中に事故を起こして殺してしまっていたのだ。自分は罰せられるべき人間だと悟ったシンは、ルッドに殺されることを覚悟し、最後にルッドから借りた携帯で父親に電話をする。電話を受けた父親は「悪い息子でごめんなさい。生まれ変わったらまたお父さんの子どもに生まれたい」というシンの言葉から、息子の命が危ないことを知り、息子がいるであろう場所へと部下を連れて急ぐ。その場に到着した父親が部下にシンを探させると、その場にいるのはルッドだけだった。そのため、部下も父親も到着が遅すぎたと理解し、父親は部下にルッドの始末を命じる。ルッドはシンがその場を去ったことを伝えようとするが、口がきけないためにうまく伝わらない。部下が手を下したその瞬間、シンが父親の前に姿を表すのだった。事件後、シンとシンの彼女ムックはある墓の前に供え物をしに寺を訪れる。供え物が子ども用のピンクのサンダルに誕生日ケーキであることから、その墓がルッドの家族の墓であることがうかがい知れ、シンが心を入れ替えた様子が描かれる。最後はルッドが妻と娘と一台のバイクに乗り、長い道を姿が消えるまで走っていく。

2. 作品の製作背景

この映画は、当初劇場公開を目的として製作された映画ではなかった。社会主義国であるラオスは映画の内容に関する検閲が厳しいため、『アット・ザ・ホライズン』のようにピアスやタトゥーをした男性が登場し、暴力や銃が描かれるような内容は、検閲の段階で許可が下りることはほぼない。しかし監督のアニサイ・ケオラは、タイのチュラロンコーン大学大学院映画専攻での修士号取得のための作品作りであることをラオス映画局に説明し、出来上がった作品は学位取得のために大学で上映するだけという条件で撮影許

可を受け、この作品を製作した。当時、ヴィエンチャンに映画仲間がいたわけではないケオラは、YoutubeやFacebookで仲間を募り、予算上ノーギャラで作品作りに参加してもらったという[Campos 2016]。

作品完成後、ラオス映画局の局長であるブンチャオ・ピットに作品を見せたところ、単なる暴力を描いた映画ではないことをピットが認め、作品に好意を示したことで、2011年ルアンパバーン映画祭で上映する許可があり、国内で上映されることとなった。その際、作品中の銃や過度な流血シーンにはぼかしを入れ、最後のシーンに修正を加えることが要求された。ケオラは、最後のシーンの修正を受け入れてでも、許可があり国内で上映される機会を得たことは十分意味のあることだったとインタビューで述べている[Kwai 2012; Rithdee 2012; Pountain 2016]。

確かに『アット・ザ・ホライズン』が製作されるまで、ラオス人によるラオスの映画作品は政府のプロパガンダ映画もしくはNGOなどの支援団体による教育ドラマ作品がほとんどで、数も多様性も圧倒的に乏しかった。特に1975年以降は多くの映画館が閉鎖されたため、『アット・ザ・ホライズン』が製作された2011年に開館している映画館は国内でたった3箇所しかない状況で、映画産業が育つ素地が長い間無かったとさえ言える。こうした状況では、当然、映画館に映画を観に行く人口は少なく、人々のラオス映画に対する関心は更に低かった。

2008年以降、徐々にラオス人の映画に対する関心は高まってきているものの、現在においても映画館で上映されている映画はタイや韓国、アメリカの映画が大勢を占めているため、ラオス映画に対する需要は高いとは言えない。しかしながら、これまでのラオス映画の流れを変える一歩として『アット・ザ・ホライズン』の存在意義は大きい。特にこの作品が重要なのは、それまで検閲では通らないだろうとされてきた様々なタブーに挑戦していることに加え、現在のラオスにおける社会問題を過度な政府批判にならぬよう扱いつつ、浮き彫りにしている点においてである。

3. 格差が広がるリアルなヴィエンチャンの状況

社会主義国家であるラオスでも、近年の急速な経済成長を受けて貧富の差が以前より開きつつある。裕福な家に生まれ、社会的にも立場の高い親を持つ子どもは、若い頃から高級車を乗り回し、わが物顔で振る

舞う。コネがないとうまく事が運ばないラオスにおいて、すでに大きなコネを持つ子どもは最強の存在にも見える。ケオラは作品の着想をこうした社会における実体験から得たという。特に主人公シンの存在は、「俺はすでに何人もの人間を車の事故で殺している」と自慢する金持ちの青年の話を元に作り上げられた[Campos 2016; Pountain 2016]。

金持ちで父親の権力を背に傍若無人な振る舞いをする青年シンと、貧しいながらも実直に仕事をこなし、愛する家族と暮らすルッド。暮らす空間は同じヴィエンチャンであっても、普段の生活通りなら決して交わらない2人が最悪の状態で交わってしまう。知らない若い男の挑発にのったシンがカーチェイス中にルッドの愛する妻と娘を殺してしまうのだ。しかしそれにも関わらず、シンの父親がその事故をお金で解決し、シンは逮捕されることなく、それまでの態度を改めることもなく普段通りの生活を送る。一方、悲劇に見舞われたルッドは為す術もない。ルッドは作品の中で、聴覚障害があるわけではないが口のきけない人物として描かれており、それはラオス社会において貧乏人は意見を述べる機会もなく、もの言えぬ存在であることを現している[Kwai 2012]。

家族を失ったルッドはシンに復讐しようと試みるものの、最後は復讐を遂げずにシンを解放するが、不運は最後まで彼にまわりつき、自らの命までシンの父親によって奪われてしまう。検閲なしの映像では、犯罪を犯そうとも金で全て解決され、貧乏人は何も権利を持たず、ただ消え去るのみと解釈することができるような展開になっている。しかし、国内での劇場公開にあたり、政府はこの描き方に修正を要請した。

修正箇所は主に2箇所、1つはカーチェイスにまつわる場面、そしてもう1つは父親がルッドの始末を命じたことに関する場面である。修正前は、シンがカーチェイス中に事故を起こし、ルッドの妻と娘が乗ったバイクをはねて2人を殺してしまった後、シンはうなだれた状態で父親の部下が運転する車の後部座席に座っている場面が映し出される。すなわち、事故後、シンは警察に捕まることなくそのまま自宅に戻ったことになる。しかし、修正後は事故後にシンが警察に付き添われて連行される場面が変わっている。事故に対する賠償金を父親が払い、犯罪をうやむやにするという話の流れは残されているものの、事故とはいえ人を殺したからには警察へ連行されなければならないという手順は修正後の場面で踏まされている。

少なくとも、人を殺すほどの事故を起こしたのに一度も警察へ行くことなく許されることはないという政府の建前がその場面に反映されている。

同じく、父親が命じて部下がルッドを殺した件に関しても、「悪いことをした人間は当然裁きを受ける」という政府の指導により[Catt 2012]、ラストシーンが変わっている。修正前のラストシーンは、シンが自分の悪行を改めることはあっても、結局のところ、社会的に立場の強い金持ちの家族は罪に問われることなく暮らすことができ、声なき貧乏人はそのまま葬られ、理不尽な正義が行われるという現在のラオス社会の一端を現しているようだった。しかし、修正後は殺しを指示した父親とそれを実行した部下が刑務所に入っている場面が加えられている。ケオラが描きかけた現在のラオス社会における現実と政府が堅持する建前にズレがあることも、リアルなヴィエンチャンの状況を現しており、検閲前と検閲後の作品を見比べることができる唯一の作品として『アット・ザ・ホライズン』は貴重な作品となっている。

4. 作中における父の存在

4.1. シンの父とシンの関係

シンの父親は銀行の副頭取を務めており、ヴィエンチャン市内の豪邸に妻と息子と住んでいる。シンが作中で乗り回す車はナンバープレートの色から2台とも個人所有の車で、高い税金を払っても日本円で約600万円以上する高級車を保有できる金持ちであることが分かる¹⁾。父親は家の外では威厳のある態度で部下たちに指示を出しているが、家庭内では妻に威厳を示すことができずにいる。妻は夫に何らかの不満を持っており、シンがいなくなったことを心配しながらも、夫と協力してシンを探す態度は示さない。一方のシンは、外では父親の威光と金を背に好き放題振る舞うものの、父親を恐れている様子はない。自ら起こした車の事故で被害者2人を殺してしまったにも関わらず、事故後、しばらく家で謹慎した後、両親が運転を許していないのに勝手に家の車を運転している。友人のサクが「いつ運転してよくなったんだ？」とシンに尋ねると、「両親は運転を許可していないけど、彼らにはどうすることもできないさ」と答えている。

シンの家庭はお金に困らず、一般のラオス人家庭よりも数倍良い暮らしをしているものの、互いを尊重し合う態度が欠けている。この家庭のあり方がシンのような若者を生み出したとも取ることができる。実際、監督であるケオラはインタビューに答えて、シンのような考えを持つ人間がどうして出てくるのか、どのような家庭がこういう人間を生み出しているのかを描きたいと述べており、ケオラの一つの答えがシンの家族の描き方に出ているのかもしれない[Campos 2016]。

シンは父親を頼りにするものの尊敬している様子はなかったが、自分の死を悟ったシンが最後に電話をかけた相手は母ではなく父だった。そしてシンは「今まで悪いことばかりしてごめんなさい。もし来世があるなら、またお父さんの子に生まれたい」と泣きながら父に伝える。父の威光を散々使ってきたからだろうか。

また、シンがいるであろう場所へ向かうのは父と部下だけで、そこに母はいない。シンの命が危険にさらされているにも関わらず、母親が心配して同行しないのも妙である。シンの家庭における母の存在に謎は残るものの、息子と父の間には、普段確認しあうことはなくとも母との間以上にしっかりとした絆があるようにも見える。しかしながら、父がルッドを殺すよう部下に命じ、ルッドが殺された後にシンが心を入れ替える様子が墓参りの場面で描かれるものの、父親に対するその後の態度は一切描かれていないため、父と息子の絆がそもそも強固なものであったのか測りかねるエンディングとなっている。

ラオス社会では基本的に目上の人や両親を敬うよう教え込まれているはずだが、この映画におけるシンは、ラオス社会の伝統的モラルに背く現代の若者の姿を集約した存在として描かれており、そこには現代の若者文化が見られると同時に、シンとの対比で描かれるルッドの存在がよりシンの傍若無人ぶりを際立たせている。

4.2. ルッドと妻子との関係

田舎から出てきたルッドは週給30万キップ(約4,000円)²⁾のバイク修理屋に勤務する修理技師で、市場で野菜を売る妻と6歳の娘とヴィエンチャン市内で暮

1) ラオスにおける2015年の一人当たりGDPは1,812.3USD(世界銀行データ <http://data.worldbank.org/indicator/NY.GDP.PCAP.CD?locations=LA>) (2016年11月28日閲覧)

2) 映画の中でバイク修理屋のオーナーらしき人物より5万キップ札6枚を受け取っている。月給にしては安いので、おそらくは週給と思われる。

しく暮らしている。ヴィエンチャン内の移動は古いホンダ50ccに乗っている。

給料日に、自分の誕生日であるにも関わらず娘のプレゼントにピンクのサンダルを購入する。最初は250,000キップが200,000キップに下がっているものを手に取るが、近くに同じようなピンクのサンダルで150,000キップが100,000キップに下がっているものを見つけ、値段の安いサンダルを購入する³⁾。また、給料日に同僚が借りたお金をルッドに返していることから、ルッドが少ない給料ながらも堅実な暮らしをしているのが分かる。

給料日に同僚に飲みに誘われるが、ルッドはどこへも行かず、妻が売り子を勤める市場へ行き、妻子と共に家に帰る真面目な父である。妻が「あなたの誕生日なのに娘にプレゼントを買ったの？」と尋ねると、ルッドは「娘がいることが十分なプレゼントだ」と答える。別の場面でルッドが妻に「早く娘が大きくなれないかな」と言うと、妻は「子どもは大きくなると両親の言うことなんて聞かなくなるわ。悪い男にひっかかったらと思うと頭が痛くなる」と心配事を言う。しかしルッドは娘に信頼を寄せており、「彼女は成長したら、自分のことは自分で出来る子になるさ」と妻を安心させる。言葉を発することができないながらも、ルッドと妻は頻繁に会話を交わし、貧しくても妻と娘と楽しみ合いながら幸せな日常を暮らしている様子が伝わってくる。

こうしたルッドの存在は、ヴィエンチャンの経済格差を表す金持ちと貧乏人の対比であると同時に、子と父、夫と妻のあり方の対比にもなっており、シンとルッドを物語の中心に据えつつ、両者の家族の様子を含めることで現代のラオス社会、特に首都ヴィエンチャンが抱える問題を問うているように思える。

3) 2017年2月17日現在10,000キップは約140円。

参考文献

- Campos, Patrick F., August 2016. "The Emergence of a New Lao Cinema: An Interview with Anysay Keola and Xaisongkham Induangchanthy" *Plaride*, Volume 13 Issue 02. <http://www.plarideljournal.org/article/emergence-new-lao-cinema-interview-anysay-keola-xaisongkham-induangchanthy/> (2016年11月6日閲覧)
- Catt, Georgia, August 26, 2012. "A tale of revenge in Laos challenges censors". *BBC News*. <http://www.bbc.com/news/world-asia-18770068> (2016年11月6日閲覧)
- Kwai, Wise, February 10, 2012. "Bright light on the 'Horizon'", *The Nation*. <http://www.nationmultimedia.com/news/life/art-culture/30175532> (2016年11月6日閲覧)
- Little Laos on the Prairie, March 18, 2013. "A Future Laollywood: Q&A with Anysay Keola of Lao NewWave Cinema Productions". <http://littlelaosontheprairie.org/2013/03/18/a-future-laollywood-qa-with-anysay-keola-of-lao-new-wave-cinema-productions/> (2016年11月6日閲覧)
- Pountain, David, June 17, 2016. "Interview: At the Horizon with Anysay Keola". *Film Doo*. <https://www.filmdoo.com/blog/2016/06/17/interview-at-the-horizon-with-anysay-keola/> (2016年11月6日閲覧)
- Rithdee, Kong, April 18, 2012. "Lao new wave: with a little help from Thailand, young Lao filmmakers are trying to turn the light back on in their national cinema". *Bangkok Post*. <http://www.bangkokpost.com/print/289256/> (2016年11月6日閲覧)

映画リスト

凡例：邦題 ①原題、②英題、③監督、④制作年、⑤制作国、⑥言語、⑦日本公開

『アット・ザ・ホライズン』 ① ຮາຍອຽນ 、②At the Horizon、③アニサイ・ケオラ、④2011年、⑤ラオス、⑥ラオス語、⑦未公開。

■主なキャスト

- シン……クンカム・シッティニョム
- ルッド……カムフー・パンルーデット
- ムック(シンの彼女)……ティップパケソーン・ミーサイブア

- ルッドの妻……ワーサナー・サイウドム
- ルッドの娘……ルンナム・ケオサイナム

■上映実績

2011年

- ルアンパバーン映画祭(ラオス)

2012年

- ラオス国内の映画館(ヴィエンチャン、サワンナケート、パクセー)
- ホアヒン映画祭(タイ)
- 外国人記者クラブ(タイ:バンコック)
- ライフエスケープス東南アジア映画祭(タイ:チェンマイ)
- オージーアジア・フェスティバル(オーストラリア:アデレード)
- バリナレ国際映画祭(インドネシア)
- ハノイ国際映画祭(ベトナム)
- カンボジア国際映画祭(カンボジア:プノンペン)

2015年

- ヴズール国際アジア映画祭(フランス)

2016年

- シンガポール・ナショナル・ギャラリー